京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年8月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 田伏 良幸

助成の種類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	第30回国際霊長類学会大会			
発表形式	☐ 招待 ・ ☐ 口頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他(			
発表題目	Rest site selection on sunlight levels: thermoregulatory significance of the semi-shade and implication for thermoneutral zone in wild Japanese macaques			
開催場所	マダガスカル共和国・アンタナナリボ、Novotel Convention & Spa Antananarivo			
渡航期間	2025年7月18日 ～ 2025年7月30日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額(円)	
		航空運賃	308,380	
		宿泊費(一部)	2,127	
		滞在費	0	
学会参加費		39,493		
その他	0			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団からの支援により、円安で費用がかさむ中、国際学会の参加に係る経費を賄うことができ、世界中の霊長類学者と交流することができました。心より御礼申し上げます。今後の要望として、採択通知を前倒して(1か月前くらいまでに)ご連絡いただけるとさいわいです。今回、採択前に飛行機を予約したため、預金取り崩しで一時的に建て替える形となりました。貴財団は直前期でも申請できることが大きな利点ですが、十分な預金がなく、口座残高を気にしながらクレジット決済している学生が少なからずいるかと思えます。渡航直前の学生には、早期の口座振り込みについてご配慮いただけるとさいわいです。			

成果の概要 / 田伏 良幸

1. 国際霊長類学会について

国際霊長類学会は、霊長類を対象とする国際学会である。この学会は2年に1回開催され、世界中の霊長類学者が交流する場となっている。今回報告者が参加した第30回国際霊長類学会（30th International Primatological Society Congress）は、2025年7月20日から7月25日の6日間にわたって、マダガスカル・アンタナナリボのNovotel Conventionにて開催された。研究テーマは分子生物学から生態学まで多岐にわたるが、報告者の発表テーマである体温調節に関する研究は少なからずあり、世界中の霊長類学者によって進められていることを実感した。報告者の研究テーマである体温調節のみならず、主に行動的側面からの国際的な動向を学ぶため、本学会に参加した。

2. 研究発表の成果

報告者はポスター発表を7月24日の18:00-20:00の2時間行い、ポスターを訪れた人たちとの意見交換をおこなった。体温調節の研究の中でも本研究のアイデアは高く評価され、新たな視点を提供しうる可能性があることを実感し、本発表に対する第三者からの一定の関心や評価をうかがい知ることができた。体温調節を行動学的に研究している人は日本ではほとんどいないため、このような国際学会を通じて対面で交流できることは貴重な機会となり、年齢の近い研究者とは特に気軽に話し合うことができた。このような人たちとゆくゆくは国際共同研究をすることができればと思っている。

3. 国立公園での野生霊長類の視察

国際学会後、種とアンタナナリボから車で3時間ほどのアンダシベに1泊2日で訪問し、体温調節研究が多く報告されている曲鼻猿類の行動観察を行った。体温調節行動は生息環境に大きく左右される。報告者の調査地である屋久島の森林とアンダシベでの熱帯雨林とでは森林内での植生密度や光環境が大きく異なり、曲鼻猿類の実際の生息環境を直接確認できたことは論文を読むだけでは得られない大変有意義な経験であった。国立公園や私設保護区での観察は1-2時間程度のガイドを3回行い（Andasibe-Mantadia 国立公園、Mitsinjo 保護区、VOIMMA 保護区）、複数の野生霊長類が同所的に生息しているため（インドリ、チャイロキツネザル、ハイイロジェントルキツネザル、カンムリシファカ、ヒガシアバヒを観察できた）、探索のための移動時間が短くできたため、個々の行動観察では十分な時間を確保できた。

末尾となりましたが、現地での国際学会発表・交流の機会をいただいた公益財団法人京都大学教育研究振興財団の関係者の皆様、藤洋作会長に心より深く御礼申し上げます。